

アホウドリ回復チーム会議(START4)の報告

場所・期日 : Hotel Protea Victoria Junction, Cape Town, SA・2008 年 8 月 8-10 日

参加メンバー : Greg Balogh(USFWS), Judy Jacobs(USFWS), Paul Sievelt(USGS), Rob Suryan(Oregon Univ), Kathy Kuletz(USFWS), Ken Morgan(Canadian Wildlife Service), Kim Rivera(NOAA), Kim Trust(USFWS), Kim Dietrich(Washington Univ, Ed Melvin の代理), Thorn Smith (North Pacific Longline Association), Graham Robertson(Australian Antarctic Division), 長谷川博(東邦大学), 出口智広(山階鳥研), John Cooper(Capetown Univ, オブザーバー)

会議初日は前回 2004 年の会議以降に行われた調査成果の報告、2 日目以降の大半の時間は、アホウドリの回復に向けたドラフトプラン(2005 年 10 月作成)について、peer reviewer からとパブリックコメントで指摘された、絶滅危惧種からのダウンリスト(Endangered→Threatened)およびリストから削除するための要項の改訂に費やされた。彼らの指摘は個体群存続可能性分析(PVA)に基づいて、回復の目標数を設定すべきというものだったので、事前に Paul らが組んだプログラムと、会議の最中に走らせたフリーソフト(VORTEX)の結果について話し合った。

その結果、鳥島および尖閣諸島を除いた新しい繁殖地に最低限必要な番い数の提示が変わり、ダウンリストでは 5 番いから 50 番い、削除では 25 番いから 75 番いとすることで落ち着きそうである(50 番いは Morris and Doak (2002) が提案する Quasi-extinction threshold(約 100 番い)を超えるように設定した値)。

鳥島あるいは他のアホウドリ類の人口統計学的パラメータを用いて VORTEX を走らせた結果、たとえ死亡率が 3%増加しても、向こう 100 年間で絶滅することはなかった。

また、Paul らのシミュレーションでは、運ぶヒナを増やさなければ、いつまで経っても新しいコロニーの番い数が増加しないという結果が示されたため、ぜひ多くのヒナの移送を試みてほしいという結論となった(来年 15 羽の移送に挑戦するという山階の努力目標は伝えた)。

その他に、STRAT としては、鳥島と聳島の巣立ちヒナの衛星追跡を来年も継続したいという結論になった。ただ、費用のかかる調査であるため、現在の資金ではやりくりできないので、分科会で議事に上げ、環境省の協力を仰ぐことが日本側の担当となった。

最後に、会議に参加したメンバーの投票で決める回復計画の実行内容の優先順位(各人は持ち点 40 点の中から 0~5 点を 41 項目に振り分ける)は、前回の 2004 年の会議(53 項目)から次のように変化した。大きく変化したのは、今年成功した鳥島からのヒナの移送および人工飼育(前回 7 位から今回 1 位)と、繁殖鳥の衛星追跡(前回 5 位から今回 12 位)。START としては、たとえ抱卵期であっても、成鳥の衛星追跡はそれほど重要な情報ではないと判断したようある。

2004 年 (上位 5 つ)

1. 新しい候補地でのデコイと音声装置による誘引
2. 鳥島の繁殖数の継続モニタリング
3. 新しい候補地に設置したデコイと音声装置のメンテナンス
4. 尖閣諸島個体群の調査
5. 鳥島の繁殖鳥の衛星追跡

2008 年 (上位 5 つ)

1. 鳥島からのヒナの移送および人工飼育
 2. 鳥島の繁殖数の継続モニタリング
 3. 鳥島と聳島の巣立ちヒナの衛星追跡
 4. 聳島飼育地のモニターと維持管理
 5. 聳島へのデコイと音声装置の設置および維持管理
- 5(上と同数). 尖閣諸島個体群の調査